

歴史

探訪

「うつくしま」への系譜



本宮町には、「本宮方式」「新本宮方式」と呼ばれ、全国的な感動を呼んだ二つの映画があります。三十数年前、本宮町のお母さんたちが、「子どもたちに見せたい映画を自分たちの手で」との思いで作ったのが、「こころの山脈」。そして、この映画を見て育った町の子どもたちが、あの感動を再びと映画制作に乗り出し、完成したのが、「秋桜」です。ここでは、「こころの山脈」制作の中心だった佐藤布^{（お）}さんと、「秋桜」制作の中心メンバーだった根本昌明さんにお話を伺いながら、世代を超えて貰われた大切な心にふれてみました。

母の思いが生んだ「こころの山脈」

昭和31年（1956）、日活映画が全盛で、とりわけ石原裕次郎が「太陽の季節」で演じたようなエネルギーッシュで無軌道な若者像が、「かっこいい」とされていた風潮を憂えた本宮町内の小学生の母親数人が、「よい映画を子どもたち、母親、教師などがともに見て、感想などを話し合おう」と立ち上がったのが始まりでした。これは「本宮方式映画教室」として定着し、全国に知れわたりました。この運動の中心だった

母と子、そして地域をつないで

心に響く映画を創った

「本宮方式」



「こころの山脈」がついに完成、地元本宮での上映会前に吉村公三郎監督からフィルムを手渡され、労苦を共にしたお母さんたちに祝福された佐藤さん。「みんなに『上を向いて』と言われたけれど、涙でもう顔を上げることはできませんでした」



母の手で、良い映画作品を その思いは全国的に共感を呼び、キネマ旬報社、日本映画記者の会、朝日新聞社などから、さまざまな賞を受けました



映画には、母親はもちろんなこと多くの町民が協力、出演しました



「こころの山脈」の撮影（本宮小学校校庭・昭和40年）左から脚本の千葉茂樹、主演の山岡久乃、校長役の殿山泰司。撮影は「本宮方式」と呼ばれる異例の町ぐるみの体制で行われ、全国的に話題を呼びました

佐藤さんは、「これが映画関係者の間で『教育映画も一般の映画も、本宮の人々は実に丁寧にしてくれる』という評判を生んだんです」と話します。そして、「親子そろって安心して見られる映画があるといいね」とお母さん同士で話し合ったことから、「本宮方式映画制作の会」が誕生しました。教師にも、母親の気持ちをもつて一人ひとりの子どもに接してほしい。そして本宮には山があつて、川があつて、緑が多くて、そこで泥んこになつて遊ぶ子どもたちがいる。これを映画に残したい。そんな思いが高まり、制作費のカンパ活動が広がる中、佐藤さんに届けられたのが、映画「こころの山脈」のシナリオでした。これは美しい本宮の自然をバツクに、一人の産休補助教員（山岡久乃）が真剣に教育に取り組む姿を中心に、母と子と先生の心のつながりを描いたものでした。映画の完成までにはさまざまな困難はありましたが、撮影に際しては、役者が町民の自宅に宿泊したり、多くの町民が出演・協力するなど、町全体の協力のもと、昭和40年（1965）ついに「こころの山脈」は完成しました。「後にも先にも、こんな温かい撮影は経験できない。役者さんや映画スタッフの皆さんはそう言っていました。そんな映画でした」 佐藤さんはそう振り返ります。

子が伝えたい思い 「秋桜」

「こころの山脈」は、見る人に深い感動を与える名作として全国的に大きな話題となり、国内のさまざまな賞を受けました。そして、それから三十数年が経った頃、当時映画を観たり、実際に映画に出演した小学生たちが、平成7年(1995)、新たな映画作りに立ち上がりました。彼らは(社)もとみや青年会議所のメンバーになっていました。あれから年月が経ち、経済的には豊かになったが、その代償として、人の心がないがしろにされてきたのではないかと。そんな思いを募らせたメンバーたちが、「今できる事は何か」を自らに問いかけたとき、答えは映画制作だったのです。当時青年会議所の理事長だった根本さんは、「一人ひとりの力を合わせて、地域の中に問いかけの石を投げ入れたかったのです」と語ります。たとえ時代が変わっても、忘れてはいけない大切なものとは何か。それを決して押しつけてではなく、みんなで考え話し合いつきかけになれば……。

そんな思いが、映画「秋桜」制作の実現につながっていったのです。そして根本さんはこう話します。「私たちは、新本宮方式で映画を作りました。前のやり方のいい所は継承しながらも、いまの時代にあった進め方が必要だったからです」。映画制作までの道のりの厳しさを知る母親世代からなまはんかな気持ちなら、やめた方がいいという、厳しくも温かい励ましを受けた彼らは、資金集めから撮影に至るまでのさまざまな障壁に直面しながらも、自分たちのやり方を貫き通し、その困難の過程で彼ら自身が強靱に成長しながら、翌年の平成8年に映画を完成させたのです。

映画で描かれたのは、エイズを発症した一人の少女(小田茜)をめぐるさまざまな拒絶・偏見



「こころの山脈」から三十余年を経て、「秋桜」にも出演した山岡久乃さん(右)。出演料が格安なものにもかかわらず、山岡さんは「事務所がダメと言っても私は大丈夫よ」と出演を快諾してくれました ©1996 映画「秋桜」製作委員会



「秋桜」制作をめぐる、夜を徹して議論を続けた、もとみや青年会議所のメンバー。そのプロセスに対するマスコミの関心も高く、新聞などでたびたび取り上げられました



撮影は主演の小田茜(写真上・中央)をはじめ、役者やスタッフが本宮で民泊しながら進行。そして撮影シーンは、安達太良山が見える本宮の美しい風景にこだわりました(写真右)



見。そして勇気・友情・愛の強さでした。死を見つめることによって初めて知る、人の弱さと強さ。このテーマが大きな感動を呼び、全国の人々の心を揺さぶりながら、上映の輪は広がっていきました。

忘れたくない、大切な心

「こころの山脈」と「秋桜」。そこには、時代と世代を超え、互いにひかれ合い、結び合う強い糸があります。

「自分たちの住む本宮と、ここから見える安達太良山の風景の撮影にはこだわりました。この信念は絶対に曲げませんでした」。そう振

り返る根本さんの言葉は、「こころの山脈」を作った佐藤さんから母親世代の思いと重なります。また、根本さんらのもう一つのこだわりは、「こころの山脈」で主演を務めた山岡久乃さんの再出演でした。撮影の最中、青年会議所のメンバーは制作の方向性をめぐって議論を繰り返していました。その重苦しい雰囲気を見守っていたのが、山岡さんの登場でした。ロケに合流した山岡さんが、当時下宿した家の人と再会し、抱き合っって喜ぶ姿を目の当たりにした一同は、これを機に一挙に結束力を強めていったのです。役者やスタッフの民泊、町民の映画出演やさまざまな協力も、「こころの山脈」当時と変わらぬものでした。だれかが何かをやるうとする



撮影場所を案内してくれた根本さん(左)。隣は当時の制作メンバーで現(社)もとみや青年会議所理事長の関信宏さん。「撮影当時、この堤防沿いは、町民がみんなで育てたコスモスでいっぱいになりました」



全国に感動の輪を広げた「秋桜」。ビデオの入手、上映会などについてのお問い合わせは(社)もとみや青年会議所 TEL.0243-33-3667まで

とき、だれもが協力しようとする温かさ。町全体を包むそんな気風は、母から子へと確かに受け継がれていきました。そして町内では、「こころの山脈」「秋桜」同時上映会も開催されました。そのとき二つの映画は、幅広い世代を共通の話題でつなぎ、「あらゆる世代が同じ時代を生きる仲間だ」という思いが、会場全体に広がっていききました。

身近なところにある、思いやりや絆。そしてふるさとを思う心。二つの映画を通して貫かれたテーマは、時代がどんなに変わっても決して忘れてはならない大切なものとして、わたしたちの心の中に、いつまでも響き続けることでしょう。